

遺構から見える重源の空間意匠についての 比較考察

菅 沼 孝 一

〔要旨〕平安時代末期に東大寺は平重衡の南都焼討により大仏殿をはじめ多くの伽藍が焼失した。重源は大勳進として大仏殿の再建を見事に果たした人物として有名である。本稿では東大寺再興に伴って重源が経営した別所や重源が関係した遺構から重源がどのような空間意匠を施したかを比較考察することにより重源が民衆教化や自らの信念をどのように表現しようとしていたかに迫る。九体丈六阿弥陀仏を祀った方形堂など発掘調査が行われている京都市の栢杜遺跡と浄土堂がそのまま残る兵庫県小野市の浄土寺、そして発掘調査等により当時の状況がある程度ははっきりしている三重県伊賀市の新大仏寺、この3ヶ所の比較から重源の空間意匠について比較考察を行う。

（キーワード傍線部分）

目 次

- | | |
|-------------|--------------|
| 1、はじめに | 2、栢杜遺跡 |
| 3、浄土寺（播磨別所） | 4、新大仏寺（伊賀別所） |
| 5、比較考察 | 6、結び |

1、はじめに

俊乗房重源は京都に生まれ醍醐寺で出家したのち四国や大峯山、高野山で修業を積んだ。50代半ばまでに宋に三度渡っている。⁽¹⁾ 治承四年（1180）平重

衡による東大寺大仏殿以下が焼失すると再建のための61歳の重源は勸進上人に抜擢された。宋人の陳和卿を起用して大仏の鑄造を始め、文治元年（1185）に開眼供養を行った。更に大仏殿の再建に取り組み、翌年には後白河法皇から周防国（山口県）を東大寺造営料国に賜り、東大寺まで用材を運搬し大仏様と呼ばれる建築様式で建久六年（1195）75歳にして大仏殿の落慶供養を行い「大和尚」の位を授かった。その後大仏殿の脇侍や四天王像、戒壇院、鎮守八幡宮、南大門の造立を行い、建仁三年（1203）に総供養を迎えている。この頃に自ら『南無阿弥陀仏作善集』を記している。建永元年（1206）86歳にて入滅する。東大寺造営の傍ら東大寺、高野山、渡辺、播磨、備中、周防、伊賀の7ヶ所に別所⁽²⁾を設けていた。これらの別所は勸進上人として用材を集めると同時に東大寺領の荘園経営を向上させ経済基盤の逸早い構築を目的に設立されている。そしてその目的達成のため用いられたのが各別所で建立した浄土堂での不断念仏と湯屋を設けての施湯行であった。この手法は院政期の民衆の心をつかみ、重源偉業達成の根幹のひとつであったことは言うまでもない。

本稿では重源が経営した播磨別所（浄土寺）と伊賀別所（新大仏寺）ならびに嘗ての状況を発掘調査から伺える栢杜遺跡の眺望、環境、庭園、建築様式、柱間、本尊、台座、光の意匠などの空間意匠がどのように現されたかを比較検討し、民衆教化や自らの信念をどのように表現しようとしていたかに迫ることを目的とする。

2、栢杜遺跡

栢杜（かやのもり）遺跡は京都市伏見区醍醐栢ノ森町にあり、醍醐山の西麓で醍醐寺南部の眺望が効き旧街道に接した環境に位置し、西側に向かっての傾斜地に堂舎が造営されていた。栢杜遺跡は『醍醐雜事記』にみられる久寿二年（1155）源師行が建立の大蔵卿堂と、重源が『南無阿弥陀仏作善集』^{(3)～(5)}にあげる建久五年頃（1195）建立と考えられる九体阿弥陀堂であった栢森堂

を想定し昭和48年～49年に発掘が行われている。発掘調査により、一辺が6.19 mの八角円堂跡が見つかった。また八角円堂跡の南側に柱間二十尺(6.06 m)三間四方の方形堂跡が見つかった。この方形堂跡は、やはり重源が開いた小野浄土寺の浄土堂とほぼ同じ大きさであることが報告されている。建築様式も建築部材の出土品等から大仏様であったとされている。発掘調査報告では八角円堂が南西方向に傾き、それを支えた痕跡も報告されている。頑強な大仏様の採用にはこうした経験が生かされている可能性がある。また小野の浄土堂は立像の三尊仏であるが、栢杜方形堂は九体阿弥陀堂であったので、浄瑠璃寺の九体阿弥陀堂を考慮し、丈六の阿弥陀仏を中心に据え、その周りを八体の半丈六阿弥陀仏が取り囲んでいたのではないかと調査報告の中で推察している。⁽⁶⁾醍醐寺で真言僧であった重源が胎藏界曼荼羅の中台八葉院を模って九体の阿弥陀仏を配置することは容易に推察できる。

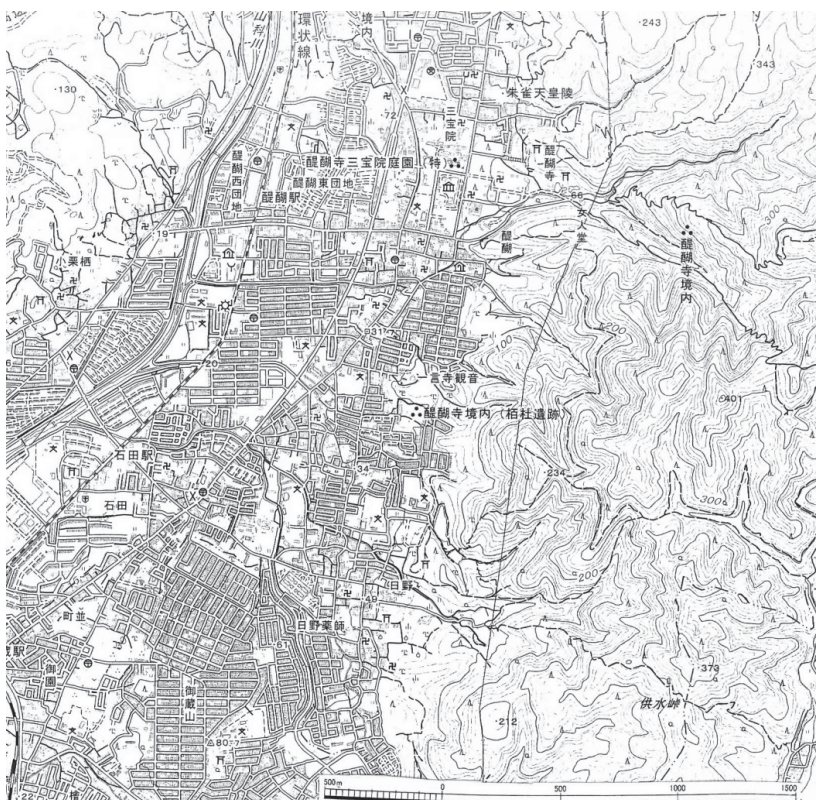
この発掘調査では遣水中心の庭園遺構が確認されている。遣水は八角円堂の雨落溝からの注ぎ水と、谷川に取り付けた溝を利用して水を導入している。八角円堂の西側で北東方向から南西方向に水を流し一部は南にもおとしている。この南におとした水は方形堂の前を流れることとなる。遣水には中島もあり、遣水の最大幅は5 mを超える。この遣水は西方が正面の配置を見せており、円堂からの眺めの方よりは仮舞台を中心に構成されている事が記され、『作庭記』に掲載された平安後期の遣水の典型的な手法を正確に継承していることが判明した事も報告されている。⁽⁷⁾この発掘調査により池ではなく大きな遣水の東側に西面して仏堂が建っていたこととなり本尊正面に夕日が差し込んだ可能性が高く内山永久寺との空間意匠の類似性が浮かび上がっている。⁽⁸⁾



(写1) 手前方形堂跡、奥八角円堂跡

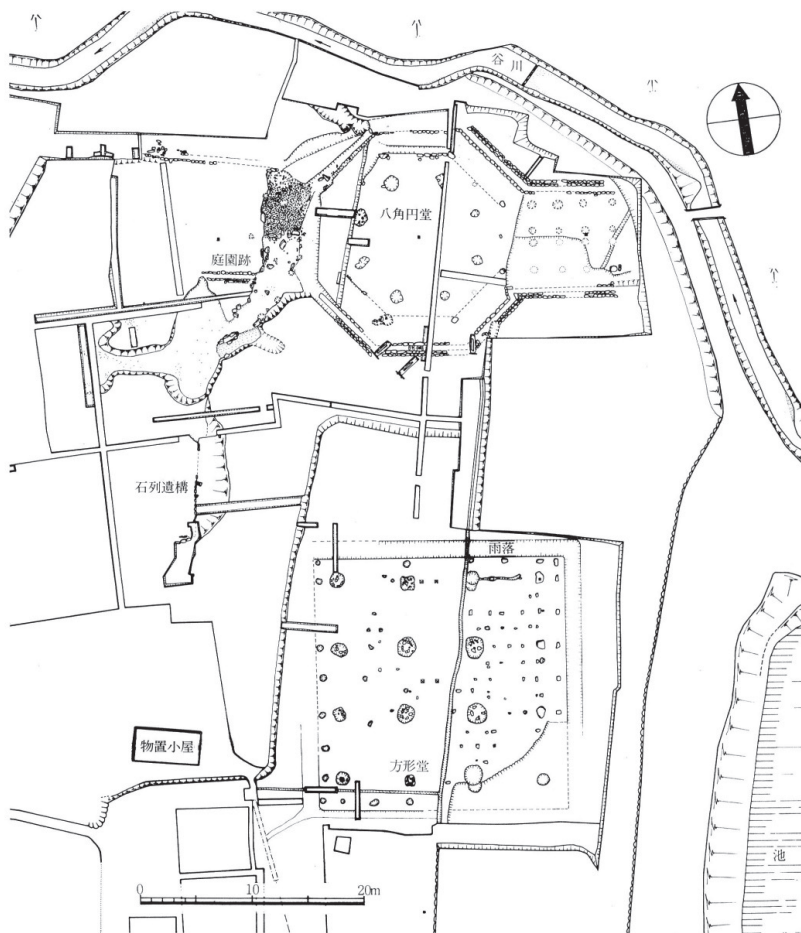


(写2) 八角円堂より西方を望む



(地図1) 栢杜遺跡周辺

— 9 —



(図説明) 調査地における遺構配置図

『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所
 1974年「(公財)京都市埋蔵文化財研究所蔵」より転載

3、浄土寺（播磨別所）

兵庫県小野市にあり国宝に指定されている浄土寺浄土堂は東大寺の南大門、開山堂、法華堂礼堂と並び重源が造営に関わり現在も残っている数少ない遺構の一つである。播磨国大部荘（おおべのしょう）はもともと東大寺領であった。東大寺再建事業にあたり播磨別所となり浄土寺浄土堂の造営に至^{(9) (10)}っている。

浄土寺は播磨平野の東側の眺望が効く小高い丘に建っており、加古川方面一帯を見渡すことができる。西方1.5kmに広渡廃寺跡があり、更に北には大寺廃寺跡・河合廃寺跡があり古代より豊かな環境であったと考えられる。境内の池は創建当時あったか不明だがそれを挟んで、西に重源当時の建築である浄土堂（阿弥陀堂）、東に室町時代の薬師堂（本堂）が建っている。浄土庭園意匠という観点からみると境内の池よりは西側に広がる上池・北池が設えと考えやすいが判断するには材料が乏しい。浄土堂の西側7km、加古川西岸の台地東端にあった金鐘城跡からも現在の浄土堂を見渡すことができ、遠く浄土堂を拝せたことも考えられる。

浄土堂は建久五年（1194）に上棟し、同八年（1197）に供養を行っている。建築様式は東大寺南大門などと同じ大仏様である。宝形造の三間四方で柱真が二十尺（6.06m）。浄土堂の本尊は快慶作阿弥陀三尊（国宝）の立像で阿弥陀如来像は像高5.3mの巨像であり、阿弥陀立像には基礎杭打ちが施されている。浄土堂は裏の西側に上池・北池を配したところ建てられている。特に有名な意匠として堂の背後の薮戸（しとみど）を開け放つと背後からの夕日が入るようになっている。阿弥陀三尊像が浮かびあがって来迎の風景を現すという光の演出効果については日本建築学会における先行研究が行われ優れた研究成果が報告されている。^{(11)～(16)}この成果は上述の乏しい判断材料を補う一翼といえる。



(写3) 浄土寺浄土堂



(写4) 浄土堂裏より西方池方面



(地図2) 浄土寺周辺

4、新大仏寺（伊賀別所）

三重県伊賀市新大仏寺の地に伊賀別所が設置されたのには諸説あるが、現時点では『南無阿弥陀仏作善集』などから建仁二年（1202）がもっとも有力とされている。谷間の全く眺望が効かない所に浄土堂が設けられ快慶作の金色阿弥陀三尊立像が安置されていた。⁽¹⁷⁾狭い谷間で圧迫感があり栢杜遺跡や浄土寺とは一線を画す環境である。寛永十一年（1635）五月十二日の台風により本堂および阿弥陀三尊像は倒壊し、貞享五年（1688）に新大仏寺を詣でた松尾芭蕉がその荒廃ぶりを伝えている。その後実梁らによって本堂の再興上棟が行われ、快慶作の頭部を用いて阿弥陀仏の入仏を行ったのが寛延元年（1747）で廃寺同様の同寺がようやく復興を遂げている。⁽¹⁸⁾新大仏寺の名称は延応年間～寛元年間（1239～46）の間に成立したとされている。

現在の本堂がどの程度創建当時の浄土堂を模して再建されたかは定かでないが、堂前のそそり立つ丘から日の光が堂内にはあまり差し込まなかったと考えられる。昭和53年に本堂の発掘調査が行われ、創建当時の遺構が判明している。伊賀別所は石造技術が多く取り入れられている。『南無阿弥陀仏作善集』では「真言密教の法具である五鈷の中央の鈷に相当する岩山の突出部の岩石を切り削り、引きならして一堂を建立した。仏壇と台座とも皆石で造った。」と記されている。創建時の台座の大きさは二十二尺（6.6m）であることが判明し、現台座は十五尺（4.8m）である。これは江戸中期再興のとき、下段13個、上段11個の石組として縮小改変されたものである。また発掘調査により本堂は本尊の台座部が二十尺（6.06m）四隅の柱間が十五尺（4.8m）で間口・奥行とも五十尺（15.15m）の方形であったと推定され、仏壇台座が播磨浄土寺より高いため宝形二重屋根で東大寺南大門と同様の大仏様の腰屋根形式であったと『新大仏寺発掘調査報告書』の中で推定されている。⁽¹⁹⁾



(写5) 新大仏寺本堂



(写6) 新大仏寺本堂よりの景観



(地図3) 新大仏寺周辺

5、比較考察

これまで述べてきた栢杜遺跡・浄土寺・新大仏寺の重源の空間意匠を一覧にすると以下のようになる。

	栢杜遺跡方形堂	浄土寺浄土堂	新大仏寺本堂
眺望	非常に効く	効く	全く効かない
環境	旧街道に接する	豊かな土地に接する	谷間で狭く圧迫感あり
庭園	遣水一部が流れる	創建時不明	創建時不明
建築様式	大仏様と推定	大仏様	大仏様と推定
柱間	20尺三間四方	20尺三間四方	15×20×15尺三間四方
本尊	丈六九体阿弥陀仏	丈六阿弥陀三尊立像	丈六阿弥陀三尊立像
台座	不明	基礎杭打ち	石造
光の意匠	本尊正面から夕日	本尊後背から夕日	日は殆んど差し込まず

(表1) 重源空間意匠比較一覧表

この重源空間意匠比較一覧表から以下のことが述べられる。現地調査で眺望が効く栢杜遺跡・浄土寺と比較し新大仏寺は眺望という観点が建立時全く考慮されていないことが良くわかる。合わせて立地環境も栢杜遺跡・浄土寺は非常に条件の整った環境であるのに対し新大仏寺は谷間で狭く圧迫感のある異なった状況である。同じく庭園の設えも栢杜遺跡は一部遣水の流れがあるものの明確ではなく、浄土寺は来迎を現わす光の意匠に特化し浄土庭園としての判断に至る材料が乏しい。新大仏寺に至っては庭園の想起が困難な立地環境といえる。これら眺望・環境・庭園については全く異なった空間意匠であったと考えられる。

いっぽう建築様式・柱間・本尊に関しては大仏様・二十尺相当の柱間・丈六阿弥陀仏とはほぼ共通した空間意匠となっている。また台座については強固な大仏様の採用に加え更なる安定性を浄土寺では求めたと考えられる。同じ流れが新大仏寺にあったのかもしれないが、重源晩年の霊石へのこだわりは本尊の安定性とは違った観点が優先したと考えるべきであろう。最後に光の

意匠についても正面から夕日が当たったであろう栢杜遺跡と背後から夕日が当たる浄土寺に比較して新大仏寺は光の意匠は推察できない状況である。

栢杜遺跡は遣水の東側に阿弥陀堂が西面して建っており、西側に眺望が開け、夕日が阿弥陀仏の正面に当たる光の意匠が推察された。播磨浄土寺では西側に眺望が開け、栢杜遺跡方形堂とほぼ同じ大きさの浄土堂が池の西側に東面して建っており阿弥陀仏の光背および前面に光が当たり来迎の様子を表現していることがあきらかになっている。いっぽう伊賀新大仏寺は谷間でまったく眺望は望めず、光の意匠も今のところ考えにくい。阿弥陀仏を祀った本堂に池や遣水の関わりは推察できない。もっとも特徴的なことは「五銚の中央の銚に相当する岩山の突出部の岩石を切り削り、引きならして一堂を建立した。」である。東大寺大仏殿の用材を求め杣入りを繰り返した重源が晩年の建仁二年（1202）に82歳で靈石にこだわったのは作善僧ではなく真言僧として自らの信じることを追い求めたのかもしれない。

6、結び

栢杜遺跡では方形堂前まで遣水の一部が延びており、方形堂造営等による八角円堂の空間機能の変化に対応して造られたと考えれば、重源が庭園の改修に一部関わったと可能性も推察できる。栢杜方形堂には西日が差し込み、来迎の意匠として九体の阿弥陀仏を照らしただろうと考えられる。浄土寺浄土堂の阿弥陀三尊の背後から光が入る意匠との共通性があり、民衆教化には絶大なる効用があったと考えられ、そのヒントが栢杜の御堂にあったのかもしれない。重源は民衆教化の手法として各地の別所における浄土堂での丈六阿弥陀仏を拝しての不断念仏を行い。また各地の別所に湯屋⁽²⁰⁾を設けて施湯行を用いて院政期の民衆の心を掴んだ。これらの手法は作善僧である重源ならではの積み重ねが反映されたものであったと考えられる。今回は比較考察が困難なため湯屋については取り上げていないが、空間意匠がこれらの手法にそれぞれ寄与したことは言うまでもない。

伊賀別所の新大仏寺は庭園遺構もなく、眺望の全く効かない谷間で狭く圧迫感のある環境に造営されている。重源は醍醐寺僧であり真言密教に長じていた。五鈷の中央の鈷に相当する岩山の突出部の岩石に地藏菩薩の磨崖仏を刻んでいる。快慶作の丈六阿弥陀三尊立像の背後に五鈷杵を象った霊岩が控えていることに重源自らの宗教観を読み取れると考えられるが、その真意はこれからの研究課題でもある。

重源の一連の空間意匠からは、民衆救済の姿勢が優先的に表に現れていて、鎮護国家的な態度はあまり読み取れない。庭がなくとも眺望が効かなくとも中身の濃い信仰姿勢により民衆救済が行われると晩年の重源は考えていたのかもしれない。今後も遺構や御堂からの眺望論や空間意匠論について研究に取り組んで行きたいと考える。

注

- (1) 小林 剛『俊乗房重源の研究』有隣堂 1980年 3～12頁
- (2) 小林 剛『俊乗房重源の研究』有隣堂 1980年 255～270頁
- (3) 中島俊司編『醍醐雑事記』三密堂書店 1973年 159頁
 一大蔵卿堂八角二階
 九鉢丈六堂 三重塔一基各檜皮葺
 本仏阿弥陀丈六像
 願主大蔵卿正四位上源朝臣師行之建立也敷地者三寶院領也
- (4) 中島俊司編『醍醐雑事記』三密堂書店 1973年 321頁
 卷七、八の裏書に見える久寿二年の六月廿一日の条に
 大蔵卿栢杜堂供養御導師 讃衆廿口
- (5) 小林 剛『俊乗房重源の研究』有隣堂 1980年 273頁
 「南无阿弥陀佛作善集」
 上醍醐寺 奉造立
 下醍醐栢杜堂一字并九鉢丈六
 奉安置皆金色三尺立像一、
- (6) 『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年 4～20頁
- (7) 『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年 21～28頁
- (8) 菅沼 孝一「内山永久寺の庭園研究」『京都産業大学日本文化研究所紀要 第18号』2013年 503～505頁

- (9) 小野市史編纂委員会編『小野市史 第一巻』小野市 1996年 391～395頁
- (10) 小林 剛『俊乗房重源の研究』有隣堂 1980年 275頁
「南无阿彌陀佛作善集」
播磨別所
浄土堂一字奉安皆金色阿彌陀丈六立像一、并観音勢至
一間四面薬師堂一字奉安堅丈六一、
- (11) 小野市史編纂委員会編『小野市史 別巻 文化財編』小野市 1996年 2～32頁
- (12) 坂田 暁洋 鈴木 広隆 中村 芳樹 小泉 隆「シミュレーションによる浄土寺
浄土堂の光環境の分析」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2005年 9月
- (13) 坂田 暁洋 加藤 嘉宏 鈴木 広隆 中村 芳樹 小泉 隆「図学科学的手法によ
る浄土寺浄土堂の光環境の分析」『日本建築学会環境系論文集 第603号』2006
年 5月
- (14) 加藤 嘉宏 鈴木 広隆 中村 芳樹 小泉 隆「図学科学的手法による浄土寺浄
土堂の光環境の分析 ―溜池における反射光の考察―」『日本建築学会大会学術
講演梗概集』2006年 9月
- (15) 加藤 嘉宏 鈴木 広隆 中村 芳樹 小泉 隆「コンピュータグラフィックスに
よる浄土寺浄土堂の光環境解析―溜池における反射光の可視化及び考察―」『日
本建築学会大会学術講演梗概集』2007年 8月
- (16) 小泉 隆 鈴木 広隆 中村 芳樹「浄土寺浄土堂の正面軸および軸方向の景観
に関する考察」『日本建築学会技術報告集 第14巻 第27号』2008年 6月
- (17) 小林 剛『俊乗房重源の研究』有隣堂 1980年 276～277頁
「南无阿彌陀佛作善集」
伊賀別所
ト五古靈瑞地建立一聚別所當其中古崎引平
巖石立一堂佛壇大座皆石也
奉安置皆金色彌陀三尊來迎立像一、并観音勢至各丈六
- (18) 大山田村史編纂委員会編『大山田村史 上巻』大山田村 1982年 348～349頁
- (19) 荒木 伸介 田中 淡 樋口 徹『伊賀新大仏寺発掘調査報告書』新大仏寺 1979
年 13～25頁
- (20) 小林 剛『俊乗房重源の研究』有隣堂 1980年 271～282頁
- (写1) 栢杜遺跡 手前が方形堂跡 奥が八角円堂跡 2012年 7月
- (写2) 栢杜遺跡 八角円堂辺りから小栗栖方面を見渡す 左手には巨椋池が見渡せ
たと思われる 2012年 7月
- (写3) 浄土寺浄土堂全景 2012年 2月
- (写4) 浄土堂裏より西方正面軸の北池・上池方面 2014年 6月

(写5) 新大仏寺本堂 2014年2月

(写6) 新大仏寺本堂よりの景観 2013年4月

*掲載の写真は全て(写1～6)菅沼孝一が撮影を行っている。

<参考文献>

- ・奈良文化財研究所編『俊乘房重源史料集成』吉川弘文館 2015年
- ・『特別展 重源上人 東大寺にささげた情熱と美』四日市市立博物館 1997年
- ・『大勧進 重源 東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出』奈良国立博物館 2006年
- ・赤川 一博『伊賀国新大佛寺 ―歴史と文化財―』新大仏寺 2004年
- ・田中 文英『院政とその時代―王権・武士・寺院』佛教大学鷹陵文化叢書8 思文閣出版 2003年
- ・杉山 信三「重源の建築技法と栢杜遺跡」『佛教藝術 105』毎日新聞社 1976年
- ・杉山 信三「鳥羽離宮、栢杜遺跡の出土庭園」『佛教藝術 109』毎日新聞社 1976年
- ・西川 新次「重源と醍醐寺・村上源氏(上)―大蔵卿栢杜堂と醍醐寺の三角五輪塔を巡って―」『密教図像 第十七号』法蔵館 1998年